（様式）

常任委員会行政視察報告書

委員会名	経済建設常任委員会	委　員　名	高木　ひろたか
視　察　地	島根県　出雲市		
調査事項	出雲農業未来の懸け橋事業及び新出雲農業チャレンジ事業について		
視察年月日	2025 年 11 月 19 日（水）		

視察内容

●出雲市の特徴点

出雲市は、平成 17 年に出雲市（旧）と隣接する 1 市 4 町が合併し、平成 23 年に斐川町と合併した。とくに斐川地域は、斐伊川が形成した出雲平野の東部に位置し、島根県内随一の豊かな穀倉地帯となっていることから、合併により出雲市は、島根県内最大の農業地帯となり、県の農業産出額の約 4 分の 1 以上を占める地域となった。水稲栽培を主体とし、水田の転作では大豆や麦類も県内有数で、他にもぶどう、ブロッコリー、柿、いちじくに加え、菊やあじさいなど花き類などの園芸、しまね牛など畜産業も盛んで多種多様な品目を生産している。

●出雲市の農業政策

農家戸数や経営耕地面積は、本市と同様出雲市も減少傾向にあり農業担い手確保、育成は重要な課題である。そうしたことから、出雲市の農業政策としては、担い手の育成や農畜産物の生産拡大への支援、省力化による労働力不足の解消などが中心となる。とくに「出雲農業未来の懸け橋事業」は、旧出雲市の「21 世紀出雲農業フロンティア・ファイティング・ファンド事業」と旧斐川町の「ひかわ元気農業支援事業」の 2 事業を統合し創設。事業内容としては、農産振興、特産振興、畜産振興を図る事業、新規就農者等を支援する特任事業、地域の課題に対応するＪＡ独自事業の 5 区分。出雲農業未来の懸け橋事業推進協議会を設立し、共通メニューに市とＪＡがそれぞれ 8,000 万円ずつ予算を負担、ＪＡ独自メニューにはＪＡが 1,300 万円負担している。ＪＡと市がこれほど連携を密に取りながら事業を展開しているのはめずらしく、出雲市の大きな特徴点と言える。今後は、大きく変化する農業情勢に対応した事業メニューの展開が課題と言える。

また、出雲市単独事業として「新出雲農業チャレンジ事業」があり、①中山間地域農業支援事業、②担い手支援事業、③モデル的・先駆的取組支援事業があり、ＪＡとの共同事業である「出雲農業未来の懸け橋事業」とのすみわけが課題と言える。

最後に合併した斐川地域では、独自の農業振興策があり、圃場の整備、農地集積化を進めるとともに、斐川地域農業基本構想を作成し、①ものづくり、②ひとづくり、③しくみづくり、④あきないづくりの 4 つの指針の下、10 年後の斐川農業に向けて取り組みを進めている。

●本市への活用

本市農業の大きな課題である農家戸数の減少、後継者不足は全国的な課題であることを再確認できた。また、出雲市の農業政策と本市が展開している事業とは気候や規模などの違いがあるが、新規就農者支援やスマート農業の推進等目的は同じである。ＪＡとの連携や農業支援のあり方、規模など本市の事業と比較しながら、活かせる部分について検討していく。

（様式）

常任委員会行政視察報告書

委員会名	経済建設常任委員会	委　員　名	高木　ひろたか
視　察　地	鳥取県　鳥取市		
調査事項	鳥取市民体育館エネトピアアリーナについて		
視察年月日	2025 年 11 月 20 日（木）		

視察内容

●鳥取市の特徴点

鳥取市は、人口約 178,000 人の鳥取県の県庁所在地で、山陰地方をリードする中核都市です。日本海に面して広がる日本最大の砂丘地帯で、観光の目玉で「砂の美術館」や鳥取城があります。二十世紀梨の一大産地として有名で、他にラッキョウやネギなどの野菜栽培も盛ん。大自然が身近で、都市的な便利さも兼ね備えた「ちょうどいい田舎ぐあい」が魅力と言われる。

●鳥取市民体育館（エネトピアアリーナ）

平成 22 年度、建設から約 50 年にわたり市民に利用されてきた旧鳥取市民体育館の耐震診断の結果、耐震性が低いことが判明。建物・設備の老朽化もあり、市民ニーズに応え災害に強いまちづくりへの対応（耐震性の確保や避難施設としての機能）のため、現地での建て替えを決定。2 度のサウンディング型市場調査を実施し、最終的に事業方式をＰＦＩ方式（ＢＴＯ型）が望ましい整備手法と判断した。判断基準としては、①ＰＦＩ方式による手法で資金の平準化ができ財政負担が抑えられる。②地元事業者の下請けではない主体的な参画が検討できる。③地元金融機関の参画も見込まれ、地域の連携強化とＰＰＰ参入機運の向上が期待できるなどが判断基準となった。

新たな体育館については、単なる体育館を超えた「市民の交流拠点」としての機能に最新の設備を持ち、マンホールトイレや非常用電源設備、備蓄スペースなど、緊急時の避難が可能な設備も整っている。また、災害時の浸水対策として、1 階を柱のみのピロティ（吹き抜け）構造とし、メインフロア（アリーナやトレーニングルーム）を 2 階以上に配置。屋根付き屋外施設 1 階のピロティ部分には、常時利用できるフットサル場や屋根付きのスケートボード場があり、災害時用のマンホールトイレも完備している。メインアリーナは 2,147 ㎡（38m×56.5m）と大きいが、固定観客席は 476 席と少ないため、大きなイベントへの対応は難しいと言える。駐車場は、第 1 駐車場で 214 台、第 2 が 33 台で合わせても 247 台と多くはなく、市民利用をメインとした体育館と言える。

●本市への活用

本市では総合体育館の建替えによるアリーナ及び東光スポーツ公園内の体育館の建設が検討されている。今回の視察先である鳥取市ではバスケットボールやバレーボールなどのプロチームがホームにしている訳ではないので、観客席数や駐車場は少ないが本市ではアリーナに相当数の確保が必要となる。事業方式と整備手法については、本市で検討していることもあり、今回の視察で学んだことについて活かしていきたい。施設としては、屋根付きの屋外設備（フットサル・スケートボード）は、本市が豪雪地帯であることを考えると検討する部分である。施設内では、子ども達も楽しめるキッズスペースもあり、トレーニング設備も整っていることから、市民にとっては活用できる体育館だと言える。

（様式）

常任委員会行政視察報告書

委員会名	経済建設常任委員会	委　員　名	高木　ひろたか
視　察　地	大阪府　高槻市		
調査事項	安満遺跡公園について		
視察年月日	2025 年 11 月 21 日（金）		

視察内容

●高槻市の特徴点

高槻市は人口約 35 万人で大阪市と京都市のほぼ中間に位置しており、ＪＲと阪急電鉄のどちらでも 15 分前後で大阪市、京都市にアクセスでき通勤・通学に大変便利で、この立地の良さからベッドタウンとして発展している。また、子育て支援や医療体制が充実している点も魅力の一つである。このように、高槻市は「交通アクセスの良さ」「都会的な利便性」「豊かな自然」の三拍子が揃った「とかいなか」として、幅広い世代に人気のある街。

●安満遺跡公園

高槻市は、太古の時代から大阪と京都を結ぶ交通の要衝であり、弥生時代の国の史跡安満遺跡（あまいせき）やキリシタン大名で有名な高山右近（たかやまうこん）の居城である高槻城など多くの歴史の舞台となったことから、歴史のまちづくりを進めている。その一つが安満遺跡公園であり、約 2,500 年前の弥生時代前期から後期にかけて栄えた大環濠集落（だいかんごうしゅうらく）である「安満遺跡」の上に整備され、「国指定の歴史的価値」と「現代的な利便性・遊びの要素」が高次元で融合している点が最大の特徴です。公園面積は約 22 ヘクタール（甲子園球場の約 5 個分）という広大な敷地で、高槻市の中心部に位置する「緑のセントラルパーク」として、市民の憩いの場となっている。

具体的には、幅広い年齢層が楽しめる施設が充実しており、ボーネルンドプレイヴィルは関西最大級とされる屋内外一体型の子どもの遊び場で、ボールプールなどの屋内遊具や泥んこ遊びができる屋外の自然遊びゾーンがある。さらに公園内には、せせらぎでの水遊びや広大な天然芝の原っぱ、どんぐりの森など自然体験ができる場所も豊富であり、遺跡公園でありながら、都市公園としての利便性が高い施設が整っている。商業施設もおしゃれなカフェ、レストラン、スターバックスなどがある。大屋根付きのイベント広場では、年間 400 を超えるイベントを開催している。

また、公園の一部には国の登録有形文化財である「旧京都大学高槻農場」の建物群が歴史拠点として活用されており、レトロで趣のある景観も楽しめる。安満遺跡公園は、古代の歴史と現代の公園機能、そして遊び場の三要素が一つになった、ユニークな公園です。

●本市への活用

歴史が好きな市長によりまちづくりが展開されているが、本市は歴史が浅いことから同じようなまちづくりは難しい。しかし、自治体の特徴を活かしたまちづくりという観点で学ぶことが多いと感じた。また、高槻市の財政状況は財政力指数が約 0.8 と本市より財政力が高いことも素晴らしい公園ができた要因の一つと言える。さらに、今回の視察は平日の午前中であったのに、子ども連れの母親が多く訪れており、子どもと一緒に楽しんでいるのが印象的であった。（共働きが少ないのか気になった）本市で同じような公園建設は難しいが、まちづくりのヒントが学べたのではないかと思う。